

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

悲しみの手編みマフラー

—いじめ考 その5—

1 4年連続最多のいじめ認知件数と止まらない悲劇

全国の小中高で認知したいじめ件数は、およそ22万件、そのうち小学校は約15万件で4年連続過去最多を記録した（文部科学省2015）。

「このままじゃ“生きジゴク”になっちゃうよ」の遺書を残して自殺した東京中野区の鹿川君事件（1986年）以後も、いじめによる児童生徒の悲劇は絶えない。

それは、「友達がたくさんできたらいいな」の思いを胸に、群馬県へ転校してきてから、まる2年が経った2010年秋の出来事だった。小学6年の女子Aさんが、いじめを苦に自殺したのだ。首をつった自室のカーテンレールには、手編みのマフラーが下がっていた。Aさんの命を奪ったそのマフラーは、母親へプレゼントをするために、Aさん自らが編んだものだった。

愛知県から転校してくる前、近所で一番の仲良しだった幼なじみは、「Aちゃんがいじめられていたなんて、信じられない」と驚く。Aさんは、「妹を泣かせたのは誰？」と立ち向かうこともあった妹思いの心優しい少女だった。

Aさんの母親がフィリピン人だったことから、「近寄るな」、「くさい」などの言葉の暴力を受け、給食時は一人ぼっちで食べることが続いていた。5年生時の作文に「1学期は、あんまり楽しくなかったです。理由は、心に傷つくことを言われたからです。（中略）でも、全員と遊ぶとなぜか楽しくなるんです」と記していた。

「いじめの中心になる子が何人かいて、他の子は何をされるかわからないので、逆らえない。クラスはバラバラ」と同級生の一人は語る。Aさんのクラスは「授業にならない時がある」ほどの学級崩壊状態だった。

「お父さん、お母さん、転校したい」、「どんなに遠くの学校でも歩いて行くから」と何度も訴えていたAさん。心痛めたAさんの父親は、学校に何度も改善を申し入れたという。しかし、クラスの間関係や空気は改善されないうまま、秋の校外学習の時期を迎えるのだった。

「明日は社会科見学がある、出てくれるかな」と担任からの電話に応じ、Aさんは勇気を奮って参加した。しかし一部の同級生から、「なんでこういう時だけ来るの?」「普段はする休み?」等の言葉を浴び、泣いて帰宅した。この2日後、彼女は自ら命を絶つのである。

2 いじめを誘発する強者蛮行の大人社会

いじめは人間関係の病である。

教室の空気を支配する強い児童生徒が、「からかい」、「陰口」、「モノ隠し」、「仲間外し」に「嫌がらせ」といったい

じめを、スケープゴートの一人に執拗に繰り返す。そして、周囲の者にもそれを強要する。「弱きを助け、強きをくじく」、それがかつてのヒーローだった。また、「弱者への施しを喜びをもって行える人格者」、それが人の上に立つ権力者のあるべき姿であり、お金持ちの正体だった。だが、今はどうであろうか？

経営上の失敗を大勢の社員切りで乗り切り、自らは居残る経営者。中小企業が製造する部品の納入価格を一方的に切り下げ、価格下落の帳尻を合わせようとする大企業、職場で蔓延する新入社員や非正規労働者へのパワハラとセクハラ、初めて10万円の大台を超え、過去最多を記録した児童虐待の数、そして、今年7月に神奈川県で起こった知的障害者施設での痛ましい殺傷事件。これら強い立場の者による血も涙もない蛮行は、今や日常的に見られ、半ば常識化しつつある。

いじめの発生率が高い教室の特徴として、「正しいことが通らない」、「正直者が馬鹿を見る」、「先生が児童生徒におもねる」といった傾向があることは、種々の調査で判明している。大人社会にはびこる規範、人道、思いやりといったものの軽視や衰退は、教室でのいじめを誘発する空気を生んでいる。

3 受容・尊重・連帯の生き方を！

島国の日本は同質社会と言われ、村八分のいじめは昔からあった。だが、「異質は排除する」というのは、時代錯誤の空気である。15年前、フィリピンはじめ異国の母親を持つ児童生徒は、既に珍しくなかった。母親は日本語も不自由で、私自身、不登校支援のカウンセリング場面で、意思疎通に苦労したことを思い出す。

今は、中国や韓国はじめ、あらゆる世界の異国の人たちと、あたりまえに生活し仕事をする時代だ。英語という共通言語で異国社員とビジネスする日本の会社ユニクロや楽天のように、異質を認め尊重し合い、その中から共通価値や目的を見つけて連帯する。排除・批判・対立ではなく、受容・尊重・連帯という関係性を優位に置く生き方こそ、今、私たち大人に求められている。それが、学校いじめを誘発している悪魔の空気を、元からしばませる強力な処方箋にもなるのだ。

「やっぱり友達っていいな」……。亡くなったAさんのノートに残された、人気者の転校生を描いた自作漫画の主人公は、そうつぶやいていたという。でも、その思いは、最後までかなわなかった。私たちは、心優しい一人の少女の命を、決して無駄にしてはならない。